



平成26年8月18日  
卓話『環境の時代をデザインで走り続ける』

建築家  
長岡造形大学 教授  
有限会社アーキスタジオ川口一級建築士事務所 代表取締役  
川口 とし子 様



私、新潟県加茂市という、昔の桐箪笥の産地の出身で、箪笥屋の娘で育ちました。今は新潟県長岡市の長岡造形大学で教鞭を取っております。私はリフォームの仕事も多いんですが、新築の仕事や小さな照明器具、家具など色々デザインしております。

私が関わったいくつかの例を紹介させていただきます。長岡市のセレクトショップは正方形で、豪雪地帯にもかかわらず中庭を取りこんでおります。住宅程度の大きさで、真ん中部分のガラスのシリンダーはクライアントの奥さんの希望でコスト調整の時にもボソにならず残りました。こういうちょっと変わったポイントがあるだけで、お店の名前を覚えてもらえないでも、あのガラスのシリンダーのあるお店だよというふうに口伝えに広がっていくのが店舗造りの1つのポイントかなと感じています。竜巻やゲリラ豪雨など、ここ数年で自然災害の規模も変わり、この曲面ガラスもコストの許す限り分厚いガラスを使っております。

次は東京の根津の、間口が3m、奥行きが12mの小住宅です。ビフォーアフターをご覧になったクライアントが定年退職を機に建て替えを計画されました。商業地域もあるので4階建ての鉄骨造を提案させていただきました。1階は三方建物に囲まれて採光もいまひとつなので、2階に食堂やら水回り、3階と4階にお部屋という設計になっています。とにかく明るい家にしてくださいというのが希望で、色々な工夫で実現できたと思っています。

リフォームに関しては、震災が起こる前から日本人の建物への指向性が変わったという兆候が表れておりました。戦後の住宅難の中、新築、持

家という状態でずっときていたんですが、5、6年前から30代の若者を中心に首都圏のマンションでは新築よりも中古の人気が高まつておりました。「中古マンション買ってリフォームが正解」という本を2010年の暮れに出させていただいたんですが、まさかその次の年の3月11日に大震災が起るとは思ってもみませんでした。住宅の寿命がアメリカでは44年、イギリスは75年といわれる中、日本は30年以下で、スクラップアンドビルドを繰り返すフロー型の社会からストック型の社会への転換が急務だと言われて来たわけです。震災以後、日本でも省エネに対する意識が猛然と高まり、いろんな動きが起こっています。

次は新小岩の物件で、私がビフォーアフターで携わったものです。お寿司屋さんのご主人が亡くなられ、看板も下ろしたあとの建物を住宅用にリフォームしたいと応募されたもので、非常に洒落で建物も立派なものでしたが、土間はあるし厨房もプロ用でしたので、バリアフリーの要素も入れてリフォームさせていただきました。この件ではビフォーアフター大賞のキッチン水回り部門で第3位をいただきました。オンエアが9月7日か14日に予定されております。多くの方にご覧いただければ、関係者一同喜ぶと思います。よろしくお願ひいたします。

